

佛教大学を去るに際して

前 川 哲 郎

『万葉集』巻第8・1418の志貴皇子の懼びの御歌は、

石激る垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりけるかも

という、万葉調の雄大精緻な御歌である。「石激る」は「垂水」の枕詞であるが、巖の上を清水が激しく送り流れる様が目に浮かぶ。「垂水の上の」は「小滝の辺りに」とか「奔流のほとりに」位の義で、こんな所に、もう蕨（わらび）が萌え出る春になったのだなあ、と春の懼びが鮮烈に印象づけられる。この懼びの御歌は、季節感の影響もあってか、この頃では、私が佛教大学に奉職するようになった頃の気持ちを、ふと思い起こさせてくれることがある。

あれから、専任教授として8年、退職後の嘱託教授としての期間も入れると10年もの間、佛教大学で実に快適に研究・教育に従事させて戴けたのは、同僚の先生方や学生諸君（特に後半の受講生は専ら大学院生であった）のご厚誼の賜物であった、と感謝している。

私の専門は大雑把に言って、3分野に亘っている。(1)トマス・ハーディ (Thomas Hardy 1840-1928) の文学（詩と小説）の研究と(2)ヘンリー・スウィート (Henry Sweet 1840-1912) やオットー・イエスペルセン (Otto Jespersen 1860-1943) から現代のランドルフ・クワーク (Randolph Quirk) 教授やジェフリー・リーチ (Geoffrey Leech) 教授等の業績で代表される英語学（特に近代英語の語法）の研究と(3)アーネスト・フェノロサ (Ernest Francisco Fenollosa 1853-1908) の日本文化（特に能）に就いての研究や紹介の現代英米文学（特にエズラ・パウンド Ezra Loomis Pound 1885-1972）への影

響等である。

トマス・ハーディは、自分の小説や詩の舞台を総称して、英国古代史から、イングランド (England) 南西部、現在のドーセット州 (Dorset) とその周辺を版図としていた王国の名を採って、「ウェセックス」(‘Wessex’) と呼んだ。従って、ハーディの小説は、総称して「ウェセックス小説 (‘Wessex Novels’)」と呼ばれる。小説に出てくる地名も、この地方に縁のある仮名で呼ばれ、どの小説にも共通の地名になっている。

トマス・ハーディの詩や小説の時代背景は、ハーディ自身が生きた時代と重なる部分も含む、ナポレオン戦争時代の19世紀初頭から、タイタニック号沈没の惨事を叙した「二者の収束 (‘The Convergence of the Twain’)」や寸鉄詩「1924年クリスマス (‘Christmas: 1924’)」の時代まで、1世紀余りに亘っている。

イーヴリン・ハーディ (Evelyn Hardy) 女史は、トマス・ハーディの長編小説『森林地に住む人びと』(*The Woodlanders*) に登場するチャーモンド夫人 (Mrs Felice Charmond) に就いて、次のように言っている。

天国にでも類 (たぐ) えるべきウェセックス (Wessex) の地に、その静けさを妨げて、打ち壊そうと分け入ってくる総ての余所者達 (‘foreign characters’) と同様、フェリース・チャーモンドも、外部から分け入り、やがて外部へ出ていく筈の人であった。(Evelyn Hardy, *Thomas Hardy: A Critical Biography*, p.210)

佛教大学を「ウェセックスの地」に類えるには、少し無理があるかもしれないが、私自身イーヴリン・ハーディ女史とは面識もあるだけに、上掲の一節「外部から分け入り、やがて外部へ出ていく筈の人」を、切実に感じている昨今である。